

張愛玲と戦時 —イメージの差異化—

一 本論文について

(1) 研究目的

張愛玲の普遍性と差異を合わせもつ自己主張は同時代の人には奇人扱いされていた¹。彼女の文学における「新旧融合」も1940年代から批評界では繰り返し指摘されてきて²、張愛玲文学を特徴づけている。本研究は「融合」に含まれる具体的な手続きを探究し、「旧」の素材と「新」の視点は張愛玲のテキストにおいてどのような過程を経て生かされるかを考察する。張愛玲のテキストにおいて、古いイメージが覆されたところに、どのような代替物が用いられるかを確認したい。

本論は張愛玲の作品が出版された当時の一読者としての立場を設定して、自分の中に既に持っているイメージの原型が張愛玲文学における変型と出会うとき、衝突が発生したり、折り合いをつけたりする過程、また既存のイメージの意味を見直し、考え直す効果が生じることを余儀なくされると想定している。したがって新しいイメージとの出会いがもたらすインパクトと思考の更新によって、自分の固有観念が揺さぶられ、次いで世界を認識する仕方が変わっていくことの可能性を検討する。それによって、張愛玲によるイメージの修正は、彼女独自の時代的および個人的文脈のなかで、現実的状况と文学的関心の両面を考慮しながら、常に更新しなければならないというイメージ自身の内的需要に答えるかについて検討したい。つまるところ張愛玲のイメージ破壊は、イメージ作りという認識論的な作業自体にどのような変化を迫るかを問いたい。

(2) 研究方法——イメージを追跡する

本研究の基本的なスタンスとは、最初はテキストから出発し、最後はテキストに立ち戻る。主な研究方法は、歴史的系譜のなかでイメージが生成される過程を追跡し、

¹例えば張愛玲と同じ時期に上海で名声を博した女性作家潘柳黛が書いた「張愛玲這個人」というコラムでは、張愛玲の変な性格、奇異な服装と独特な見解について紹介がなされた。柳黛「張愛玲這個人」『伊報』、1946年10月5日、7日、8日の0004版。

²傅雷は「新しい言葉と古い言葉の融合、新しい意趣と古い意趣の交錯」を張愛玲の作品の特徴とまとめている。迅雨（傅雷）「論張愛玲的小説」『万象』、1944年第3巻第11期、53頁。譚正璧も評論のなかでそれを引用しており、「多方面の教養をもつ作家」と張愛玲を称する。「論蘇青及張愛玲」『風雨談』、1944年第16期、65頁。

イメージの効果を吟味することである。

張愛玲の作品において、イメージはときどきテキストに散らばった個々の現象として、切断されているように見えるが、テキスト全体の方向性に沿ってイメージの欠片をつなぎ合わせてみると、相互間の関連性が浮かび上がり、テキスト全体を貫く構造的な形態が現れてくる。断片的な部分、すなわち細部こそ個人的解釈に向けて開かれるテキストのオリジナリティが宿るところである。テキストを分析するということは、細部が与える手がかりを集積して作品の核心へと辿りつける道程である。

ここでは「イメージの束」(image cluster) という概念を取り入れる。この言い方はシェイクスピア演劇の研究者たちによって提起され使用されていた。³その定義として、「作者は無意識のうちに、一連の関連性を持つ言葉や図像を頭の中で積み重ねて、それらの構成要素の何一つによって、シリーズ全体が思い出されることになる」⁴と説明されている。この概念は張愛玲の作品におけるイメージ分析にも応用できると思われる。張愛玲の小説にせよ散文にせよ、重要なイメージは、大抵の場合、一箇所に留まる単独な存在ではない。そのイメージと関連性のあるイメージはほかにもあり、イメージAがイメージBを喚起し、イメージBがイメージCを呼び覚ます。小説の場合に即して言えば、描写、地の文、評論、会話などの表現形式が互いに関連付けられ、整合されることによって全体的なメッセージが伝わる。我々がすべきことは、要するにどのように一本の糸、すなわち一つの主題を通して分散したイメージを連結させるかである。

(3) 本研究の想定されている意義

前述したように、これまで張愛玲文学における「新旧融合」を指摘した研究は多いが、片方に絞って論じたものが大多数で、「新」と「旧」の両方にはどのような関係が想定されるかを明らかにした研究は少ない。本論は張愛玲文学における「新」と「旧」の要素は断絶的な関係にあると見るより、持続的な関係にあると見ている。確かに張愛玲の作品における文学伝統の扱い方は、エリオットなどのモダニズムの作者に見られるような、「正統」と呼ぶものを「従うべき規則ではなく、それ自体のなかで絶えず修正される」ものとして「再生」⁵させる作法に共通している。張愛玲の場合、彼女の独自の手立てが何かと言うと、イメージの想起によって伝統を具現化することである。

社会的因習にせよ、文学上の約束事にせよ、それらは張愛玲の作品では断片的に引

³シェイクスピアのイメージには有機的な相互関連性がある、ユニットとして見ることができるという観点は、最初は1794年にWalter Whiterによって指摘された。のちにEdward A. Armstrong等の論ではこの言葉が活かされた。Walter Whiter, *A Specimen of a Commentary on Shakespeare*, ed. Alan Over, (London: Methuen & Co Ltd, 1967), lx-lxi.

⁴Walter Whiter, lx.

⁵マイケル・ベル「モダニズムの形而上学」『モダニズムとは何か』マイケル・レヴァンソン編、加藤めぐみ等訳、松柏社、2002年、47頁。

用され、明確な言葉をもって批判されるような一次通過的に消費されるわけではなく、作品における支配的なイメージの連続的な形成に参加することによって作品の構造に浸透することになる。イメージの見直しはテーマの確立に依拠し、またテーマを感覚的、表象的に表す役割をも担う。イメージの再生は、小説の各部分、人物造形や会話や描写が有機的に組み合わされるなかで行われる。本研究を通して、張愛玲文学における「新」と「旧」の要素の再定義、または両者の間の相互作用について解答を試みる。そのうえイメージへの細心な考察は、張愛玲研究、強いては文学研究において、作品が個人になす意味や与える刺激を原点にしてテキスト現象を手探りながら、作品の成立をめぐる文学的/社会的な約束事の系譜を見渡せる視点をも持つような観察を促したい。

張愛玲文学におけるイメージの差異化は、文学の固定概念や表象の典型を対象にすることに限られず、社会的な通念や現実の人々の考え方の描写にも見出せる。本論文はテキストを時代的、社会的な背景に照らして分析し、主人公の言葉や内面描写に創作背景にいる人々の意識が一部反映されていることをも認める。ただし、その場合でも、小説の人物を実在した人間、主人公／語り手を作者と完全に同一視することはしない。張愛玲の自伝的小説についても、事実を記述する部分が多くあることは否めないが、作品の性質はあくまでもフィクションであることを忘れてはいけない。そのため登場人物の言動における時代的な影響の在り処を探るより、時代背景がプロットの展開に制限を与え、社会的規範が人物の行動に枠を与えることの意味について考えていきたい。

「差異を作る」ことは、本研究が焦点を当てている張愛玲文学の性格であるのみならず、張愛玲批評に対して本研究がねらっている目的でもある。それを実行するために、テキストをベースにして、先行研究を踏まえたうえで張愛玲文学また張愛玲研究を読み直すことである。本研究は張愛玲の作品はテキスト表現においてはトランス・ジャンルのであり、主旨においては多義的であるため、何一つの自律的な文学のカテゴリーに分類することは不可能であるという主張をもつ。張愛玲文学の読み直しは差異を作るというフェミニズム文学批評の認識論を基本的な立場として、かつての男性中心の読み方（例えば傅雷の意見）に異議を呈しながら、近年になって定式化されつつある傾向が見えてくるフェミニズム的批評をも補足したい。したがって張愛玲文学についての読み直しは、ふたつの定義を含むと考えられる。ひとつは今まで不評とされた作品（「連環套」）を再評価すること。もうひとつはよく議論された作品（「傾城之恋」）について、今まで考えられていない解釈の可能性を発見することである。本研究は「読みという行為を具体的な出来事」⁶として、読み手個人が持つ文学理念や社会的な立場を顕在化させる実践として捉えている。

差異化する読み方は、張愛玲のような多種多様な文化的・社会的背景をもつ受容層に広く読まれて、研究されている作者の場合は、研究の限界を押し広げて、論評者個

⁶ ショシャナ・フェルマン『女が読むとき・女が書くとき—自伝的新フェミニズム批評』下河辺美知子訳、勁草書房、1998年、12頁。

人の感性に沿って論を展開し、豊かな視点や方法を引き出すことができるということを、本研究を通して証明したい。

(4) 各章の要旨

本論文は七つの章に分かれて、張愛玲の戦争、植民地、セクシュアリティをメインテーマとして描いた小説もしくは散文を取り扱った。第二章では日本文化や日本人に言及される散文を対象として、戦時中張愛玲の異文化受容の態度、また受容から創作への転化の過程を把握してみた。散文は中国では近代以来、私人性を帯びてきたジャンルであり、1940年代、張愛玲は散文の中でのみ、日本占領下の時勢について個人的な印象や感想を述べている。ましてや戦時下の上海では散文の執筆活動は女性知識人たちに公共で発言する機会を提供することになっていたため、張愛玲は散文においてファッション、踊り、絵画を語るミクロの視点を通して、異文化間の比較、戦時体制、民族性などのマクロの論題へと押し広げることができる。本章はとどのつまり、張愛玲の異文化受容は戦時下という時代背景のもとでどのように条件づけられているか、もし戦争中異文化の間の相互関係においては拮抗が融合にまさるとしたら、彼女の日本文化の受容は中国人としてのアイデンティティにどのような脅威をもたらしたかを解き明かすことを目的としている。

第三章は小説「霸王別姫」と「傾城之恋」における京劇『霸王別姫』の引用を例にして、張愛玲の戦争を題材とする小説において京劇の要素が果たす役割を検討した。『霸王別姫』は1920-1940年代に人口に膾炙した京劇の演目である。女性が夫・主君に忠節を尽くして殉死するテーマは一見して時代遅れに見えるだろうが、舞台上の戦争の背景と現実には起きている日中戦争の時代状況が重なり合うところで、近代における女性が国家に対する責任が示唆されている。張愛玲の作品では、劇の筋に沿って物語を展開させる「霸王別姫」にせよ、戦争のイメージと京劇のシーンをメタファー化する「傾城之恋」にせよ、小説とそれが引用したプレテクストの関係は、プレテクストに内包されるメッセージをそのまま伝えるより、現実の文脈に照らしてイメージの意味を変えたり、約束事が現実状況に通じないことを露呈させることによってパロディ化したりする。こうして、小説は社交、恋愛の場面と戦争の場面を緋い交ぜにすることによって、日常的な文脈と非常時的な文脈が地続きすることを示すほか、戦争のイメージを家庭または恋愛に関する叙述に織り込ませる。一方、流蘇のイメージの変化を通して、イメージの形成がどのように外部的な視線や圧力と自己認識に影響されるかが見えてくるだろう。

第四章では従来悪評高いとされる「連環套」をオリエンタリズム的小説の系譜と引き比べ、コロニアルな状況を反映する作品として読み直しを試みた。「連環套」は、一見異質な文化背景の話をつぎはぎしただけのように見えるが、実はコロニアルな状況の下、香港という近代都市がコロニアルな危機に巻き込まれた様子を一人の女性の人生を通して照らし出している。霓喜の性と金銭が本位である男性関係、母性愛の薄い親子関係、またはアイデンティティが宙ぶらりんになっている共同体内の人間関係

から、彼女をオリエンタリズム的小説にしきりに見られる東方女性の典型に反撥するようなコロニアルな現実を生きる女性として位置づけたい。したがって本章では霓喜が「蝶々夫人」などの戯画だというアプローチから、「連環套」では人物の造形及びプロットの展開にロマンや、センチメンタルな要素がいっさい切り捨てられていることの意味を考える。以上により、本作品において反他者化の試みがどうやってなされたのかを検討した。

第五章では張愛玲の日本映画受容が彼女の小説創作に与えた影響を明らかにしようとして、張愛玲の作品のメディア横断的な性質を突き止めようとした。張愛玲が日本のミュージカル映画の童話表現と身体表現を賞賛して、これらの表現は彼女が唯一通俗小説と認めた作品「多少恨」にも見られる。本章は「多少恨」と日本映画との比較を通して、張愛玲が映画の主旨や表現手法を小説に接ぎ木する際に、違うメディアに適合するよう何からの修正か変形を行ったのかを考察した。もう一つ、シンデレラ・ストーリーやメロドラマ性のような大衆向けの要素を小説で扱うとき、張愛玲は物語の筋、人物の関係図、身体描写などにおいて、読者に典型との親近性を喚起させながら、人物の両義的な心理や、動機付けが困難なアクションを書くことによって、反省的な視点と社会批判的意識を加える、ということを論証した。

第六章は異なる時代における張愛玲の戦争経験に関する異なる書き方を対照し比較した。1944年に書いた散文「燼餘録」と1963年に脱稿した自伝的小説 *The Book of Change* では、張愛玲は1941-1942年に香港で経験した空襲、飢饉や陥落後の動乱から取材し、戦争を両方の中心部に据えて戦争経験を書き綴った。「燼餘録」では香港の一大学生という立場で戦時中の香港の状況を報告し、大学生の群像を描くことによって普遍的な人間性についての思考が巡らすのに対して、*The Book of Change* では語り手は大部分の時間に主人公と同一化または同感し、自ら生死ならびにセクシュアリティをめぐる様々な危機的な事件に遭遇するときの実感とそこから得た知恵を述べる。同じ素材を扱う張愛玲の前後の作品を見ると、彼女の創作における差異化とは、他人の作品に対するのみならず、本人が過去に書いたテキストに対しても成立できる概念であることを提出している。

第七章は小説「等」、『小団円』が京劇『紅鬃烈馬』と共通する時空間の表象の仕方と、戦争背景に置かれた女性人物の相違する態度について探究した。京劇『紅鬃烈馬』は戦争時に夫婦がやむを得ず離散する現実を描く。また妻が夫を待ちに待ったすえに一家団欒で報いられる結末をもって、観客、特に女性観客に未来の展望を約束してくれるゆえに、日中戦争のなかで話題作になっていた。しかし劇に込められたジェンダー・イデオロギーに対して、当時には懐疑の声も沸きあがっていた。張愛玲は劇で予想された男女関係が不自然だと主張する側に傾けるが、劇に表現された人物の時空間の制限を越える思いに、そこに描かれた団円の情景に一種の魅力を感じるのも確かである。彼女は理性のうえでは劇の原理を疑うにも関わらず、劇に引きつけられてやまないことは、「団円」の表象を自分の作品で変形させて繰り返し利用することで裏付けられている。そこで張愛玲の受容と創作の間の一つのジレンマ、伝統的文芸作品に

含まれるジェンダー・イデオロギーを内面化する趨向と、虚構の幻想を追い払うために目下の現実を見詰めようとする姿勢の間のジレンマが垣間見られる。

第八章は張愛玲が中後期に創作した、第二次世界大戦の戦時中と終戦直後という時代性を前面に出す小説に書かれた性と暴力が絡み合う男女関係を分析の対象としている。人物の戦争についての認識と性愛についての認識がどのように通底し、似ているイメージで描写され、作者が感じ取る時代の運命と個人の運命の間の連帯性を表現しているかを考える。本章は引き続き現実とフィクションの関係を問い詰めようとした。プレテクストについて、性と暴力で特徴づけられた社会的事件が報道され、のちに文芸化された過程ではどこに注目すればよいかを考える。張愛玲の受容について、彼女がどのように事件に関する言説を受け取り、どのような心象風景を形成しえたかを問ってみた。最終的に、作者はトラウマ的な記憶を書き記すにあたり、どのように過去の出来事をフィクション化することによって心的傷害と対峙し、暗い経験を超克するかを考察した。総じて言えば、フィクションでは現実の結果を必ずしも覆すわけではないが、それと違う価値標準をもって現実の印象を変転することができる。暗殺計画を途中で放棄し、命を落とした女スパイは、自己犠牲的な愛情を貫き通すことで「勝利」と「生存」の意味を問い直させることになる。そして現実の恋愛関係に傷つき失望した張愛玲本人は、かつて恋愛のときに経験する今—この感情や感覚を蘇らせ、そこから自分の存在意義を確認している。

1950年代以後に書かれた戦争を背景とする男女関係をめぐる小説では、第二次世界大戦の出来事が書かれているが、それによって反映されているのは、冷戦期の社会的雰囲気と時代的心理である。「色、恋」と『小団円』ともは張愛玲が嘗て経験し、もしくは見聞きした事件から取材しているが、創作にあたり、作者は事実に近いとしようとするわけではなく、あくまでも読者を驚かせる「意外性」を重視する意図で歴史言説から斥けられた暗部、見落とされた細部に光を当てている。1950年代以後の張愛玲の戦争叙事は、戦時下の男女の性的交渉の描写と力関係の呈示をもって具体化される。エロスとタナトスの間で行き来する人物の心理的葛藤と精神的な重荷が冷戦時代の読者にも伝えうるゆえに、小説は虚構と現実の間を架橋し、戦争を過去のことでなく、恒常的、日常的な時間に滑り込ませて、我々が目下向き合っている課題として提出している。

(5) 結論

時間軸に沿って、張愛玲文学におけるイメージ作りの脈絡を整理したい。張愛玲によるイメージの差異化は、外と内二つの範囲で行われる。外について語る場合、その時代の文化的約束事とそれを基盤とする固定観念や社会因習を対象とする。内に向かった場合には、差異化する対象は、同じ事件や人物に対して作品ごとに違ってくる表現の仕方、またそれを裏付ける物事への認識の仕方になる。だからこの場合は張愛玲の自己差異化とも言える。戦争をテーマとして違う時期に創作された作品を見ると、全体的な表象において趣旨が一貫している一方、描写の重点は異なっている。1940

年代の作品では、戦争の隠喩は日常生活的、家庭的な文脈のなかに織り込まれて、修辭上の洒落として用いられて、家族間のいざこざ、恋人の間の口喧嘩にたとえられる。あるいは細部描写からそうした隠喩が透けて見え、情景化される。それはあくまでも人物の行動を推し進め、互いの関係を決定するために仲介的な役割をする。1950年代の場合、戦争は1940年代のように後景化されるのではなく、一目ですぐわかる主題的な位置を占める。それに相まって戦争と互いに表象しあう男女関係は、生存の根源を揺るがすほど深刻性を帯びてくる。しかも戦争の影響についての観察は、社会現象から人間の内面まで及ぶことになる。1950年代以後になると、戦争の叙事は依然として日常生活の文脈にまわりつき、男女の力関係という隠喩を使用するが、主人公の生死の間をさまよう経験を描いたり、異国の人間が戦後を過ごす様子に言及したりすることで表現の手法が多様になる。主題においても、文化の伝承と修正、他者との連続性、共同体のアイデンティティを超える共感へと作者の関心が深まってかつ広がることがわかる。これらの張愛玲の創作に起こる絶え間ない差異化は、時代とともに移り変わる彼女の認識上の変遷を反映していると考えられる。

ここまで、張愛玲のイメージの再生産の要素を明らかにしてきた。彼女は伝統的なイメージを継承するが、それは彼女が生きた時代の各段階における社会的、個人的状況と照合しつつ修正を入れた上での継承である。序章から持ち越してきた質問、張愛玲のこのような作業は、イメージ生産の系統について何か定まった構造とは違った性質を示唆するのかをもう一度考えると、張愛玲のイメージは、受容の源泉である原型イメージとの関係は受容背景によって大いに影響されること、また自らが誕生する際には既にテキストのなかの環境によって条件づけられていることを自己表明していることである。それは驚喜のような、違和感とグロテスク感を惹起してやまない造形でもある。彼女のような合理的に説明できないイメージは、かえってそれを成立させる不条理なコロニアル的家父長社会を特徴的に反射することになる。こうして張愛玲のイメージ作りの営為は、回帰的かつ自己反省的な過程である。新しいイメージは常に過去の文学伝統と連続しており、しかも特定の文脈に条件付けられ限定されていることについては無知であり、ステレオタイプ化に向かって突き進む一方のイメージ作りの前例とは違う。イメージは自分を生み出す時代背景、作者の個人状況、言説環境など相違する部分をもつ要素に絡め取られることを、心理や行動の矛盾、歴史と現実の混在や言葉と意味の乖離などを通して自己呈示している。

(6) 今後の課題

張愛玲の自身に対するイメージの差異化と言え、その最もよく知られている手法は、旧作の翻訳・翻案・書き換えなどがある。本論は戦争をテーマとする作品の系譜をたどり、異なる時代に同一の題材を取り上げた作品群を考察し、素材の扱い方が異なる様を明らかにした。なぜこのようなテキスト的現象が生じるか、それを説明するには創作背後の動機を配慮する必要がある。そのため創作時の社会思想や文学理論に

関する資料を収集することも必要ではないかと思ってくる。テキストから離れるわけではなく、研究者目下の習慣的思考を超えて、今まで気づかれていないがテキストを解釈するのに有用な手がかりを発掘するためである。しかし本研究では民国時代の社会・文学・ジェンダー状況についての知識がまだ不十分であるため、張愛玲作品の成立周辺については、考察が足らなかった。張愛玲の作品と彼女が生きる環境、創作する環境の関係性についてより発想的かつ堅実な研究を行うべきであると思われる。ここで言う「環境」は、張愛玲の人生履歴、時代背景、もしくは彼女が受容した作品を生み出して流布させる社会環境だけを指すものではない。それは張愛玲のテキストに痕跡を残しており、彼女の記憶のなかに点在するトポスである。例えば彼女に影響を与えた知人のゆかりがあると記される場所、彼女が鑑賞した作品のなかで出た風景、また彼女が何らかのきっかけでコンプレックスを抱いた事件なども数えられる。作品をよりよく理解するには、これらの「環境」がどのように創作の自発的な動機になるかを十分に考えねばならない。こうした問題に対する精査は、今後の課題にしたい。

本論で分析したイメージの差異化の三つの特徴——マスメディアのメタ的利用、フェミニズム文学との親和性および虚構と現実の関係への弁証的な視点は、民国時代の中国作家に限って見れば、張愛玲独自の性質であるとほぼ断定できる。ここで一つの質問が生じてくる。民国時代の中国作家のなかで、もしほかに近代化の衝撃を受け、戦争を生き、中国伝統の教養を持ちながら異文化的志向をもつ作者たちがいるとしたら、彼／彼女たちは必然的な結果として、アイデンティティの軋轢を体験することになる。その場合、彼／彼女らはどのように作品で対処するか、彼／彼女の作品はどのような個人的な文学的特徴を示しているのか。それがどのような「環境」によって決定されるものなのか。張愛玲を筆頭として、今後はこの課題に打ち込んでいきたい。